

## ヒメトビウンカに対する苗箱施用殺虫剤の施用時期と防除効果

ヒメトビウンカは、近年西播地域を中心に増加傾向にあるイネ縞葉枯病を媒介する。ヒメトビウンカに対するクロチアニジン粒剤の播種時施用は、7月上旬まで移植時施用と同等の高い効果を保持することが明らかになった。

### 内 容

ヒメトビウンカ（写真1）は6月に小麦ほ場やイネ科雑草地から水田に飛来し、7月上旬に次世代虫が発生最盛期を迎える。水田で初期のイネ縞葉枯病（写真2）を引き起こす原因となっているのはこれら6月から7月上旬に発生するヒメトビウンカであり、水稻栽培において苗箱施用殺虫剤は欠かせない防除手段である。苗箱施用殺虫剤は、従来移植時の施用が一般的であったが、近年では作業性の高い播種時施用も広く利用されている。播種時施用では育苗中に薬剤がイネに吸収され、移植直後の体内での殺虫成分濃度はすでに上昇しており、移植直後からの防除効果も期待できるが、半面残効が短くなる可能性がある。

そこで、5月13日播種、6月9日定植の水稻「ヒ



写真1 ヒメトビウンカ成虫  
胸部背面（矢印部分）の色はオス（左）で黒色、メス（右）で黄褐色



写真2 イネ縞葉枯病の初期発病株

ノヒカリ」とクロチアニジン粒剤を用いて、ヒメトビウンカに対する播種時施用と移植時施用の効果を比較した。その結果、播種時施用した場合は、イネ縞葉枯病の初期発病の主な感染時期である7月上旬まで、ヒメトビウンカに対して移植時施用と同等の高い効果を保持していることが明らかになった（図）。

### 普及上の注意事項

育苗期もイネ縞葉枯病の感染リスクがあることから、クロチアニジン粒剤の播種時施用の利点は高いと考えられる。また、初期発病は出穂異常などの後期発病を誘発するので、最高分げつ期までに発病株が多くみられる場合は本田防除の実施が望ましい。

柳澤 由加里（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

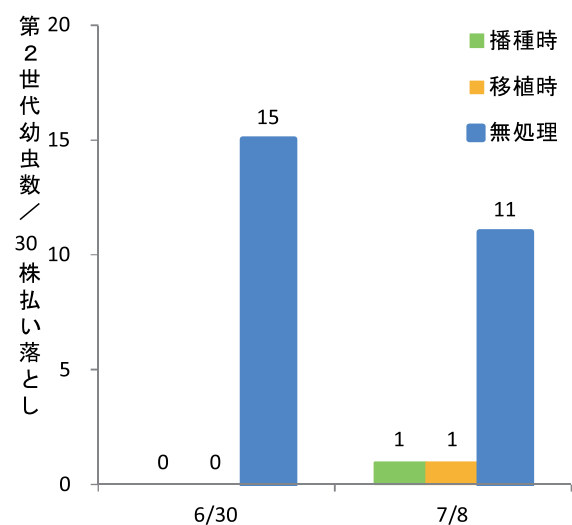


図 クロチアニジン粒剤の播種時施用と移植時施用によるヒメトビウンカ防除効果

播種2014年5月13日、移植6月9日、品種「ヒノヒカリ」、薬剤施用量苗箱あたり50g